

第3章 大学・学生を活かしたまちづくりの事例

本章では、大学・学生を活かしたまちづくりの事例の検討を通して、大学地域連携拠点の設置・運営を踏まえた、地域と大学との連携による地域活性化の可能性、学生を活かしたまちづくりの可能性を考察する。

そこで、大学地域連携拠点の設置・運営の事例として①相模原市立市民・大学交流センター、②柏の葉アーバンデザインセンターを、また、学生を活かしたまちづくり事例として③金沢市学生のまち・金沢の推進、④学生タウンなごやを取り上げる。

1 相模原市立市民・大学交流センター

(1)設置の背景等

相模原市が再開発ビルの中に、地域活動や市民活動を行う市民と高度な専門性を有し、豊富な人材を抱える大学が連携して、福祉、健康、環境等、様々な分野に関する地域の課題解決や活性化を図り、快適で魅力あるまちづくりを推進する“大学センター型と市民センター型”を融合した施設として設置している(図3-1参照)。

交通利便性が高く、にぎわいや交流の拠点として多くの可能性を持った立地特性を活かしながら、新たな地域活動や市民活動の創造を目的として、交流・発信機能、学習・研究機能、リエゾン(橋渡し)機能を発揮する施設運営をしている。



出所：草津未来研究所撮影 2014. 10. 24

図3-1 相模原市立市民・大学交流センター

(2) 施設の特徴等

この施設の特徴としては、貸館時間を2時間単位としている点で、そのため、午後8時～午後10時の時間帯でも学生やゼミ等に活用されている。

また、「さがまち学生 Club」として、相模原・町田地域の学生が地域の活性化およびまちづくりに繋がる活動を企画・実施していく学生主導型体験プロジェクトである「情報誌 Sagamachi」の取材等の協力もされている。

さらには、公益社団法人相模原・町田大学地域コンソーシアムが大学の研究成果等を発表できる場として、図3-2のスペースを活用し毎週土曜日の午後2時に自主事業であるオーサースカフェを開催(年間40回程度)されている。



出所：草津未来研究所撮影 2014. 10. 24

図3-2 相模原市立市民・大学交流センター

その内容は子育てや食育、資産運用、防災、街並み景観等の生活に密着した話題をはじめ、地域の伝統芸能や料理、音楽、美術の楽しみ、地元産業の紹介、留学生の日本体験、科学の最前線の話題等を各界の専門家が親しみやすく語り、来場者が気軽に楽しめる「にぎわい空間」を演出されている。

2 柏の葉アーバンデザインセンター²⁴

(1) 設置の背景等

千葉県柏市にある、柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)は、2006(平成18)年に東京大学教授の北沢猛の提唱をきっかけとして、東京大学、千葉大学、千葉県、柏市が共同で創設した新たな産業と文化の創造拠点である。2007(平成19)年に四者が共同で策定した「柏の葉国際キャンパスタウン構想」がこの地域の強力な推進力となり、「国際学術都市」と「次世代環境都市」という2つの将来ビジョンに向かって「公・民・学の連携」に取り組んでいるものである。

現在は、東京大学、千葉大学、柏市、三井不動産、柏商工会議所、田中地域ふるさと協議会、首都圏新都市鉄道の7つの「構成団体」により、共同で運営されている。これに、関係公共団体や各種専門企業を「協力団体」として加え、フラットかつ柔軟な連携により、学習プログラム、研究活動、社会実験・事業創出、デザインマネジメント、コミュニティ・市民活動、学生プログラム等、様々な取り組みをされている。

(2) 施設の特徴等

この施設の特徴は、周辺地域のジオラマを配置して、まちを俯瞰的に見ながら、市民や教員、企業担当者等が絶え間なく出入りし、約 230 m²のスペースにそれぞれが思い思いの場所で専門家とまちづくりについて熱く、ときには気軽に議論を交わす場所となっているところである。

また、UDCKには直接雇用の正職員は存在せず、多様な主体からの派遣で成り立っている。UDCKでは、日々多様な関わりが生まれているため、方向性を見失わないためにも明確な検討課題を表3-1のようにUDCアジェンダというかたちで定めている。これは多様な主体が開かれたまちづくりの場でまちづくりの方向性を共有する際にも参考になる。

こうした都市計画や市民まちづくりの枠組みを超え、地域に係る各主体が連携し、都市デザインの専門家が客観的な立場から携わる新たな形のまちづくり組織や拠点をアーバンデザインセンターと捉えている。

²⁴ 「アーバンデザインセンター」は、①連携による空間計画 ②専門家の主導 ③拠点と見える化 の3つの資質からなる「まちづくりの場」と定義されている。

表3-1 アーバンデザインセンターのアジェンダ

UDCアジェンダ2011
1. 公・民・学連携の拠点となる
2. 明確な目標と戦略を打ち立て実行する
3. 常に具体のフィールドで活動する
4. 都市空間のデザインを担う専門家が主導する
5. 新しいアイデアに挑戦し続ける
6. 一人一人が活動をエンジョイする
7. 最新の情報を広く公開し、共有する
8. UDCネットワークを全国へ、そして世界へ

出所：アーバンデザインセンター研究会(2012)

こうした UDCK の取り組みは、田村地域デザインセンター(UDCT)、郡山アーバンデザインセンター(UDCKo)、アーバンデザインセンター横浜(UDCY)、アイランドシティ・アーバンデザインセンター(UDCIC)、松山アーバンデザインセンター(UDCM)といったUDCネットワークを全国的に展開しつつある。

3 金沢市学生のまち・金沢の推進について

(1)金沢市学生のまち・金沢の推進の背景等

金沢市は市内に18の大学・短期大学・高等専門学校と29の専門学校が集積しており、また、石川県は人口1,000人当たりの学生数は全国7位、人口10万人当たりの高等教育機関数は全国2位である。県外からの学生が約6割をしていることから、「学生のまち」として、学生と市民との相互の交流や学生と金沢のまちとの関係が深まることで、にぎわいと活力が創出されるまちを目指し、平成22年4月1日に「学生のまち推進条例(正式名称：金沢市における学生のまちの推進に関する条例)」を施行し、表3-2に示すような事業を展開している。

その中で「金沢まちづくり学生会議」を発足し、学生らしい、枠にとらわれない柔軟な発想力と行動力で、金沢の中心市街地の活性化に取り組んでいる。

また、学生からの自主的な活動に対する支援や、日常生活における相談を一元的に受け付ける学生相談窓口も開設し、さらには、まちなかにおける市民と学生の交流の場、まちづくり活動における情報交換の場および学習の場として、大正時代の金澤町家を改修した「学生の家」と旧料亭大広間の部材を用いて新設した「交流ホール」の2つの建物からなる

「金沢学生のまち市民交流館」が設置されている(図 3-3、図 3-4 参照)。



出所：金沢市提供資料

図 3-3 金沢学生のまち市民交流館(学生の家)



出所：金沢市提供資料

図 3-4 金沢学生のまち市民交流館
(交流ホール)

これらの取り組みの背景としては、大学の郊外移転と相まって、学都としての情景が薄まり、学生は、アパート・マンションと学校の往復となり、金沢の歴史・文化に触れる機会がなくなって来たことを危機感として持っておられた当時の市長の発案によるものである(総事業費は約4億7,700万円)。

表3-2 金沢市学生のまち・金沢の推進の主な事業

項目	内容
学生のまち推進条例の制定	<ul style="list-style-type: none"> ・「金沢市における学生のまちの推進に関する条例」2010(平成22)年4月1日施行 ・学生と市民、学生とまちとの関わりを深めるための全国初の条例 ・基本理念(第3条) 学生を育む社会的機運の醸成 学生の自主的な活動を促進 学生、大学地域、市の相互の理解と連携
学生のまち条例推進体制	<ul style="list-style-type: none"> ・条例の推進のため、まちづくりを市と協働で進めている「金沢まちづくり学生会議(第15条)」、学生と市民が交流し、地域活性化のために取り組んでいる「学生のまち地域推進団体(第16条)」、高等教育機関、事業者等の全体で推進していく「金沢学生のまち推進会議(第21条)」の3つの組織が連携して取り組んでいるところである。 ・中心的な役割を担っているのが「金沢まちづくり学生会議(第15条)」であり、2014(平成26)年度は第5期生約60人の学生(学校間の枠を越えて7大学から参加)で構成され、金沢学生のまち市民交流館を拠点に活動している。
協働のまちづくりチャレンジ事業(学生部門)	<ul style="list-style-type: none"> ・学生を対象に広くまちづくり企画を公募し、優れた企画を行政との協働により実現し、創造的で自主的なまちづくり活動を支援 ・2014(平成26)年度は、14団体応募、採択団体7団体
学生サポーター企業登録	<ul style="list-style-type: none"> ・企業による支援体制の確立や学生と企業との相互の交流機会を広げる。(2013(平成25)年10月現在20社登録) <pre> graph LR Council[金沢学生のまち推進会議] <--> 2 登録審査 City[金沢市] City <--> 1 登録の申出 Company[企業・団体] City <--> 3 登録の承認 Company City <--> 4 事業一覧提示・協力依頼 Company Company <--> 5 協力の申出 City Company <--> 6 資金の提供などの協力、企業名の紹介などの特典 Activities[学生のまち推進事業] </pre>

出所：金沢市資料に基づき作成

(2) 金沢学生のまち市民交流館の特徴等

この運営の特徴は、学生および市民のまちづくり活動の相談窓口として、コーディネーターを配置し、貸館ゾーン(学生の家和室、土蔵、交流ホール)については、学生で構成する団体、高等教育機関、町会その他の地域団体、市と協働してまちづくり活動をおこなっ

ている団体は無料で施設を利用できる場所である。

また、図 3-5 のようなマッチングボードを活用して学生と市民が交流できるように仕掛けづくりが行われている。

金沢市の担当者によると学生のまち推進条例の制定等によって、市内や地域での取り組みは前進したとのことである。また、学生が地域コミュニティに参画していくには行政の存在が必要であるとのことであった。

今後は、民間企業にいかに学生を支えてもらえるようにするのが課題であるとのことであった。



出所：草津未来研究所撮影 2014. 10. 24

図 3-5 マッチングボード

4 学生タウンなごやの推進について²⁵

(1) 学生タウンなごやの推進の背景等

名古屋市は、約 13 万 6 千人の学生がおり、大学・短期大学生の人数は、政令指定都市中第 2 位となっている。

名古屋市の基本計画である「名古屋市中期戦略ビジョン」において、「若い世代が学び、遊び、働けるまちをつくる」(施策 27) ことを目標に掲げ、「学生＝まちづくりのパートナー」と位置づけ、学生がいきいきと活動するまち「学生タウンなごや」を目指している。

「学生タウンなごや」を推進するため、名古屋テレビ塔を活動拠点に、2012(平成 24)年 4 月に NAGOYA 学生キャンパス「ナゴ校」を仮想キャンパスとして開校している。

ナゴ校は、図 3-6 の名古屋市が事務局となり、学生と社会(地域・企業・大学・行政)とをつなぐプラットホームの役割を果たすものであり、学生が学外の実践的な場で社会勉強

²⁵ <<http://www.gakusei-cam.com/>>(2014 年 12 月 18 日閲覧)

ができる機会を設けるとともに、若者ならではの柔軟な発想とパワーをまちの魅力・活力の向上につなげる取り組みを実施している。



図 3-6 ナゴ校の仕組み

(2) NAGOYA 学生キャンパス「ナゴ校」の特徴等

NAGOYA 学生キャンパス「ナゴ校」では、学生の活動を応援するため、学生向けに無料で会議室の貸出を行っている。

また、「名古屋を自分たちの手で盛り上げたい」という意思のもと集まった学生たちが主体となって、活動の企画から実施まで、それぞれ表 3-3 に示すように 4 つのチームに分かれ、学生の手により行っている。

表 3-3 チームの概要

チーム名	概要
イベントチーム	年に一度の合同大学祭「NAGOYA学生EXPO」をはじめ、イベントを中心に、学生のパワーで地域に賑わいをつくり、まちを元気にする事業を実施。
情報発信チーム	学生インターネット放送局「NAGOYA TOWER CHANNEL」や「てくてく名古屋」等、学生目線で映像やMAP等を通じて、名古屋の魅力を発信する事業を実施。
SOCIAL交流チーム	「ナゴ校」を骨格となる、学生と社会をつなぐチーム。「未来WORK」や「NAGOYA学生SPOT」等、学生が「つながる」事業を実施。
クリエイティブチーム	美術・芸術・建築・ウェブ等を学ぶ学生、また、そのような分野に興味がある学生のチーム。技術レベルは不問！「ナゴ校」の各事業におけるポスター・パンフのほか、イベントでの会場装飾等をする。

出所：名古屋市資料に基づき作成

5 小括

以上の取り組みを見ると、いずれもベースとなっているのはすべて、社会貢献、地域貢献につながる取り組みである。

また、大学や学生という地域資源を活用するために、大学や学生と市民をつなげるプラットフォームをつくり、まちづくりをより楽しいものにするためのプランニングをしているところである。

これからの草津市のまちづくりにおいて、多くの学生に都市の賑わいの源泉になってもらうことや、学生が草津を「第2のふるさと」として、愛着や誇りを持ってもらうことが必須であり、その仕掛けづくりが必要である。

そのためにも、学生がまちづくりを考えるきっかけづくりをコーディネートする人材の配置や市民や学生が異なった組織や立場で対話できるような「場(機能)」の設置について検討が必要である。